熊日1971.10.10

隠れ水俣病

第三部

<4>

さながら"地獄めぐり"

底知れぬ未認定患者

多発地帯

いまも異常が…

「御所浦は予想以上、水俣は相当数いた」―とし八、九月、天草郡御所浦町嶋口と水俣市湯出、月浦、出月を対象に、初の二斉住民検診を実施した熊大第二次水俣病研究班の武内忠男班長（第二病理教授）は、検診結果をこう総括した。

患者が相当数いると診断された水俣市の三地区は、もともと水俣病の多発地帯。これまでに、この地区だけで六十三人が認定され、現在さらに数十人が認定を申請している。

湾に沿ったこの地区は、複雑に入り組んだ入り江の奥にあり、風光明びな漁村とミカンの里。明るい秋の日差しが降りそそぐ丘にはミカンが色づき、時折り漁船のエンジン音が夢のように聞こえてくる。

だが、地区内を歩くと、そんな感傷は一気に吹っ飛ぶ。漁家の庭先には、胎児性患者がムシロにすわって遊んでいる。ぼんやりと歩いてくる老人の目もおかしい。立ち話をした主婦は、しきりに手足のシビレを訴える。認定患者たちと同じように魚介類を食べ、同じ暮らしをしてきた人たちだ。みんなどこかに異常があると訴えるのが常識だ。

水俣病発生いらい初めてといってよい大がかりな住民検診。しかも長い間見捨てられ、自らを卑下して隠れてきた住民たちだ。果たして検診に来てくれるだろうか、研究班はすいぶん気をつかった。

だがフタをあけてみると、検診会場に当てられた各地区公民館には、待ちかねたように地区民が押しかけ、その関心の高さは研究班を驚かせた。長年、水俣病と取り組んでいる医師の一人は「変わったなあ」と思わずもらしたという。

こうした地区民の声にささえられて、この地区での検診は一〇〇名近い成績をあげた。検診が終わった日、研究班と地区民、それに市公害課も加わって、お別れの宴席が患者宅で開かれた。各漁家からボラが持ち寄られ、大ザラに盛られたサシミとしょうちゅう。診た者も診られたものも、立場を忘れて飲みかつしゃべり、手を取り合った。水俣病を隠してきたもろもろのもの、たとえば水俣という風土や住民の煩悩などに、明らかな変化が起こったのだ。

沿岸で千人？

熊大研究班の検診結果はまだ明らかにされていない。ほんの憶測にすぎないが、この三地区だけで、二百人程度の新しい患者が発掘されるのではないかという見方もある。

研究班の一員として検診に加わった熊大精神神経科教室の原田正純講師は「十年近くここに来ているが、いま考えてみると、本当に医師として恥ずかしい思いだ。たとえば、十年前、患者の家へ行くと、家族が寝ている。ばあちゃんどうしたなと聞くと、血圧が高いという。医師からそう言われて寝ているんですよね。ああそうなんですか、ってなるようなものでは済まされてきたんですね。一体あのころなにをしていたんだろうかと思いますね。いま診てみると、そんな人はみんなおかしい。医学の責任を追及されても仕方がないです。一日も早く結論を出して、なんとかしてあげたい」と反省する。

こうしたなかで、六日から県の一斉健康調査がこの地区でも始まった。六日には三地区から新たに六人が水俣病に認定された。水俣病発生地帯―この地区を本当に歩いたものは、水俣病の底知れぬ深いふちをのぞいたような、背筋の寒くなるような恐怖を覚えずにはおられないだろう。

では、不知火海沿岸でどれくらいの隠れ水俣病患者がいるのか。熊大研究班のある医師は「千人はいるのではないか」と断言する。隠れ水俣病の発掘は、いまやっと始まったばかりなのである。

熊大検診を受ける水俣市月ノ浦の住民。そこには従来のようなうしろめたさのようなものはなかった